ハドソン川を挟んで

米国コロンビア大学からの便り ①

経済学部教授　高橋宏幸（たかはしひろゆき）

宇多田ヒカル、「いちご白書」…そして9・11

"September 11, 2001　Lest We Forget"（「忘れまい　2000年9月11日を！」）

こんな標語が氾濫するアメリカは東海岸のニュージャージー（NJ）州に居を構えて早くも5カ月が過ぎた。現在、ニューヨークのマンハッタンにある創立1754年のコロンビア大学ビジネス・スクール（Columbia Busibess School）の客員研究員（visiting scholor）として、中央大学の在外研究でこちらに来ている。

コロンビア大学というと、元阪神タイガースで勇名を馳せた野村監督の奥さんである野村沙知代さんの履歴詐称問題で世間の注目を浴びた大学、あるいは最近入院騒動や電撃的な結婚で話題に事欠かないあの歌姫の宇多田ヒカルさんが入学した大学といった方がピント来るかも知れない。われわれ戦後派のベビーブーム世代の場合、激しい大学紛争の舞台として、映画「いちご白書」に映し出される白い丸い屋根と柱が神殿を彷彿させるロウ記念図書館（Low Memorial Library）や近代日本文学の研究者のドナルド・キーン元教授が思い出される大学である。もっとも、私と中大で同期で、学生運動家であったカラオケ好きのEさんの話では、ばんばひろふみの「いちご白書」のカラオケでは、映像にコロンビア大学のロウ記念図書館とだぶって中大の大学紛争の場面、しかも片手にゲバ棒、頭にヘルメットをかぶったEさんの雄姿が映し出されているという。そうだとすると、コロンビア大学と中央大学がこの映像では大学紛争の場面で重なり合っていることになり、なんとも奇妙な感じだ。

それはともかくとして、忘れもしない昨年夏の9月11日のワールド・トレードセンター（世界貿易センター）の惨状を伝えるニュースは悪夢というほかなかった。その頃、在外研究の受け入れ先を検討する中で、カリフォルニアには日本企業の現地法人で財務担当取締役（CFO）をつとめ、在米20年数年になる大学時代の友人がいたこともあり、アメリカ西海岸の大学の話を優先的に進めた。ほとんどそこに決める腹づもりをしていたものの、最後の最後になって手続きが進まない。そんなこともあり、急遽に白紙に戻すしかない。

目を西海岸から、東海岸に移すと、ハーバード大学をはじめ、ダートマス大学、エール大学、ブラウン大学、コーネル大学、コロンビア大学、プリンストン大学、ペンシルバニア大学といったアイビー・リーグ（Ivy League）を構成するきら星のような大学が名を連ねている。アイビーとは蔦（つた）という意味で、蔦の絡まる校舎からイメージされるようにいずれも長い伝統を誇る私学で、これら8校が全米にその名を轟かしているアイビー・リーグ校である。もちろん、このアイビー・リーグに所属しない私立大学や州立大学の中にも、これと同等ないし、それ以上の評価を受けているものもある。それにしても、アイビー・リーグの大学は、いずれもノーベル賞受賞者や学界をリードする高明な学者など研究スタッフの充実ぶりは羨ましいかぎりである。そればかりでなく、この長い伝統の中で政界、財界、学界

に数多くの優秀な卒業生を送り込み、社会に対しても絶大な影響力を持ち続けてきていることや今なお世界中から押し寄せてくる優秀な志願者の群れ、いずれも今更ながらため息が出てくる。

そこで様々な角度から検討したところ、ダートマスは小粒ながらすばらしい環境のもと、私の研究計画に願ってもない教授が居たものの、本人から来年定年との知らせが入る。残るは、コロンビア大学である。予定している教授の研究は、私の研究テーマにかなり一致している。よし、ここに決めよう、と思った矢先である。テレビに映し出される無惨な光景。場所は、なんとコロンビア大学のあるニューヨークのマンハッタンだ。一瞬、コロンビア大学を諦め、他にあたるべきか迷いが走る。こうなれば、あたって砕けろでやるしかない。受け入れを依頼する手紙を送って、思いの外早く返事が来た。貴兄の研究にとても興味があり、受け入れたい旨の手紙であった。

受け入れ教授のキャサリン・ハリガン博士（左）と筆者。コロンビア大学ビジネススクールで。

5人と1匹の渡航準備

この日から残すところ約半年、コロンビア大学での在外研究の支度に取りかかることになる。未解決の問題が一つあった。我が家の愛犬である柴犬の「ロッキー」をどうするかである。犬好きの私が、ペットショップのガラス越しにじゃれつくあまりにも可愛い柴犬の子犬にすっかり目を奪われ、ほとんど衝動的に買ってしまったのがこの「ロッキー」なのだ。息子達が名付けたいかにもバタ臭い「ロッキー」という名を、てっきりあの映画に出てきたボクサーから取ったのだとばかり思いこんでいたら、そうではなく彼らのテレビ・ゲームに登場するロッキーだったということを知ったのはずいぶん後になってからだ。

私が体調不良を訴えるようになったのは、それからほどなくであった。躾の大事な時期に主から見放された柴犬は、次第に人のいうことを聞かなくなり、挙げ句の果て家族に噛みつくという暴挙に出るようになった。それでも私の友人達に我が家の愛犬を預かってもらえないかという打診を恐る恐るしてみたものの、「ロッキー」の傍若無人振りが知れ渡っており、私の懇願に冷たく、「おまえの家の犬を預かったら、うちの可愛い愛犬はかみ殺されてしまうから駄目だよ」と最後通告を突きつけてきた。もはや万事休す。

郊外の1軒家

こうした出国までの苦労とは裏腹に、アメリカへの犬の入国があまりにも簡単なのにはすっかり拍子抜けしてしまうほどで、われわれが成田で預けた荷物をピックアップする為、回転式のベルト・コンベアーの前で並んでいると早くも館内放送で犬を引き取りに来るよう案内があっ

た。慌てて指定された場所に行ってみると、あたりには係員も見あたらずカーゴだけが投げ出され中に惨めな様子のロッキーが居るではないか。良かった、良かった、思ったより元気そうだ。

こうして、家族5人と1匹が無事アメリカへの入国をはたすことができ、アメリカでの在外研究の一歩が踏み出された。コロンビア大学のあるニューヨークのマンハッタン島とハドソン川を挟んで隣接するニュージャージー州は日本人も多く家族連れにはうってつけだ。しかし、ニュージャージー州でもコロンビア大学に通うのに便利なところとなると、一ヵ月の家賃がなんと3500ドルから4000ドルもかかるという。そんな高い家賃、誰が払えるのかと半分腹を立ててみたものの、実に多くの日本の駐在員が会社から一カ月3500ドルもの家賃補助を受けなんの不自由もなく優雅に暮らしているというから再びビックリ仰天。いささか不便なニュージャージーの郊外にある一軒家に住むことになったのは、「ロッキー」には愛玩犬のように家の中でソファーの上に寝そべらすなどという芸当はとても無理に決まっていたことと、治安が良くて、少しでも家賃の安い物件を探し求めたからだ。

J.F. ケネディー空港に、家族5人と愛犬ぶじ到着

われわれが物件を探した地域では築年数40～50年というのもざらで、壁も柱も天井も何度もペンキを塗り替えてあり色斑や塗り残しなどがやたらと目に付く。そんなことをあまり気にせず薄目で辺りを見渡せば、樹齢100年をゆうに超える大木や老木が生い茂り、自然の中に抱かれた幻想的な世界が広がり、幸せな気分になれること間違いない。こうしたすばらしい自然環境はいたるところにあり、ニュージャージー州が文字通り「garden state（庭園の州）」であることを否が応でも実感させられる。

ともかくアメリカは車社会、ましてニュージャージーの郊外ともなれば、車なしでは明日から生活に支障を来す。そこで、入国して2日目、当座の足としてレンタカーを借りることにした。娘と2人で、薄暗くなり始めた帰り道、左ハンドルのもどかしさもなんのその、必死で我が家に帰る道を探すものの辺りは似たような景色ばかり、おまけに道路名の標識がほとんど見えない。1時間以上あたりをぐるぐる廻って、ようやく我が家にたどり着いた時は、すっかり夜も更け家で待っていた家族達の心配そうな顔がやけに大きく見えた。富士山の裾野に広がる青木ヶ原の樹海に迷い込んだ親子が無事生還したような感動をおぼえたものの、たちまち疲れと虚脱感に襲われるばかりであった。

バスと地下鉄を乗り継いで

今では何の苦もないことで、最初は随分と悩まされたものだ。早く生活のリズムを掴みたい、そんな思いから、バスと地下鉄を乗り継いでコロンビア大学に出掛けることにした。家から徒歩3分くらいのところにあるバス停からニューヨーク行きの始発のバス路線が2つある。1つは186番、もう一つは167番である。

186番はハドソン川に架かるジョージ・ワシントン橋を渡り切ったマンハッタン島の北部に位置するバス・ターミナルが終点で、地下鉄Aラインに接続する。この地下鉄Aラインこそ、ジャズの「地下鉄A列

車で行こう」でもお馴染みのもので、あの黒人街ハーレムを通り抜けてマンハッタンの南にあるダウンタウン方面に向う。他方、１６７番はハイウェイを南下し、ハドソン川の底を横切るリンカーン・トンネルを抜けてマンハッタン島の42丁目にある大きなバスターミナル、ポート・オーソリティーが終点となる。コロンビア大学の朝８時15分から始まる講義に出席するには、朝６時45分発の１８６番で出掛けなければならない。１８６番と１６７番とではまるっきり、乗客の層が違うことに驚かされる。

マンハッタンの会社に勤めるホワイトカラーの白人達は１６７番で、黒人、ヒスパニック、アジア系の人々はそのほとんどが１８６番に乗り込む。いわゆる一流企業はマンハッタンの北ではなく、せいぜいミドル・タウンから南側に集中していることもあって、42丁目に到着する１６７番のバスは通勤の安全な足となっている。

朝早い時間にバス停で始発を待つ10人程の乗客のうち１６７番のバスに乗り込むのはマンハッタンの高層ビルに通うホワイトカラー層の白人系の人々である。残された私だけがたった1人で１８６番のバスに運賃2ドル80セントを払い乗り込むことになる。始発では乗客が1人であった１８６番のバスも次から次とヒスパニック系の労働者やアジア系の人々、そして次第に黒人が乗り込みほとんど満席になって終点に到着する。

ここから比較的長い地下道の連絡通路を足早に通り抜ければ地下鉄の乗り場があり、さらにそこからダウン・タウン方面行きの地下鉄A線に飛び乗り、次の駅で、今度は地下鉄ブロードウェイ線に乗り換える。この乗り換えがなかなか大変で、エレベーター係りが同乗する大型のエレベーターを利用するしかない。かなりの年代物のエレベーターはお世辞にもきれいとは言えない代物で、真夏のむせ返るような暑さときつい体臭と香水の入り混じった中でやたらと横幅のある黒人が椅子にでんと腰をかけ、目の前に扇風機を回し、ラジカセをがんがん鳴らしながらエレベーターを操縦する様は何とも異様なものだ。

このエレベーターに大勢の黒人やヒスパニック系のごつい体格をした連中と一緒に押し込められるのだから、たまったものではない。ところが、最近では不思議と何の抵抗感もなくなってしまったのだから、慣れとは恐ろしいものだ。

コロンビア大学ロウ記念図書館

最初のうちは乗り換えることを忘れ、この地下鉄A線の１１６丁目で降り、地上に出てそこがハーレムの一角であることに気づき、あわてて駅に戻ったり、エレベターでの乗り換え方法が分からずあちこちうろうろしたり、乗車ボタンと非常ボタンを間違って押し、周りが一時騒然となり、乗客に睨みつけられ、挙げ句の果て据え付けられた緊急連絡用のアンサーホーンから駅員に「何だ、どうしたんだ！」と大きな声で呼びかけられたり、失敗の連続で、そのたびにドット疲れが出てきた。こうした苦労のかいもあり、いまではコロンビア大学のある地下鉄ブロードウェイ線の１１６丁目には目をつむってても行けるなどと格好をつけてみたもの、ハーレムに隣接するこの地域が夜ともなれば危険地帯であることに何ら変わりはない。